

作業療法学生における臨床実習での学びの過程

中島ともみ

聖隷クリストファー大学

【はじめに】現在、本校作業療法学科における臨床実習は、評価項目改編後3年経過しており、このカリキュラム構成がどのように学生の成長を促しているのかを検証すべき時期に来ている。そこで、まずは本学作業療法学生が臨床実習を通して行った振り返りから、作業療法学生は何をどのような過程で学んでいるのか、その現状を把握すべきと考えた。

【目的】本研究では、学習の向上のプロセスと、そのための能力開発の機会と支援の内容を開発することを目的に、以下のことを明らかにすることとする。8週間1回、7週間2回、合わせて3回の長期臨床実習を通して記述された、各期の全体を振り返った「振り返りシート」から、作業療法学生の実習における学びのプロセスを、探索的に明らかにする。本研究における振り返りとは、D. コルブの4段階の体験学習サイクルにおける「観察・振り返り・復習→概念化・一般化→再試行を検討」の段階より細分化させた、リフレクション(reflection)を云う。体験を学びに変える重要な部分であり、プロフェッショナルはこれらを通し、臨床における実践知を学ぶ。

【方法】対象は、聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部作業療法学科2016年度卒業生の臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(8週間×1回、7週間×2回)にて記載された実習の「振り返りシート」28人分(研究への協力の同意を得られたもの)とした。なお、振り返りシートの項目は、学んだこと、今後の課題、行動目標が実習期ごとに記述されている。解析方法は、テキストマイニング手法により分析し、臨床実習ⅠとⅢの記述について探索的に分析した。

【結果】学んだことについては、臨床実習Ⅰで対象者の評価に必要な、基本的な知識や疾患の知識や、机上の知識と対象者を結びつける事を記載した内容が多かった。また作業療法の流れを学んだことが記載されていた。臨床実習Ⅲでは、作業療法のプログラム立案を中心とした知識を学んだことが記載されていた。

今後の課題では、臨床実習Ⅰで解剖学、生理学、運動学などの基礎的知識の確認が多くを占めたが、対象者とのコミュニケーションが上がっていた。一方、臨床実習Ⅲにおいては、基礎知識の確認より、対象者の全体像の把握を重きに置いた記述がなされていた。また、優先順位を考えた効率の良い行動や、対象者を含む他職種、家族とのコミュニケーションが挙げられていた。

行動目標では、臨床実習Ⅰで自分の内面を振り返り、疑問を掘り下げる姿勢や、コミュニケーションの方法について、具体的な実行や行動の変化が必要であると記載されていた。また、基本的知識を深めることに加え、対象者と自分自身の関係性についての記載が認められた。疑問を掘り下げる姿勢は、臨床実習Ⅲになると、疑問をもつことから分析することや文献からエビデンスを求める姿勢に変化していた。また、国家試験に向けての知識の再確認が出現していた。

【考察】学んだ事、今後の課題では、臨床実習ⅠとⅢの学習目標に沿って出来たこと出来なかったことが記載されていたと考えられた。一方、今後の行動目標は、Dreyfus(Dreyfus Dreyfus, 1987)が述べた、技能修得モデルの中級者以上が示す行動である、全体像を見る、理論原則を振り返る姿勢、自己補正や自己改善などが挙げられていた。これは、振り返りシートを作成する際に、学内教員が助言を行ったことが大きいと考えられた。具体的な体験を受け、抽象的な概念化、そして能動的な試みへ進むため、上級者から初学者への助言が重要であることが示されたと言える。